

鬼おにのひとり娘むすめ

むかし、鬼おににひとり娘むすめがいて、その娘が、はじめて人間を食べる年ごろになりました。ある日のこと、鬼は、街道筋かいどうすじをきれいな男が通ると聞いたので、娘をつれていきました。そして、

「おまえははじめて人間を食べるんだ。今ここを、きれいな男が通るそうだから、その男を食べてしまえ」といいました。娘は、

「いや。はずかしいからいや」といいました。

「そんなこといわないで、食べるんだ」

「おとうさんがそばにいてくれるんなら、食べるわ」

そう話していると、向こうから、きれいな男がやって来ました。あんまりきれいな人なので、いくら鬼が、

「さあ、食べる。そら食べる」といっても、娘ははずかしくて食べることができません。すると、男のほうも食べられると困こまるので、

「それなら、私と勝負をして、あなたが勝ったら食べてもらいましょう。あなたが負けたら、ここを通らせてもらいますよ」といいました。

そこで、鬼おにが行事ぎょうじになって、娘と男は腕相撲うでずもうすることになりました。男は強くて、娘はすぐにひっくり返されてしまいました。

そこで、つぎに足相撲あしむくしました。やっぱり男が強くて、娘はひっくり返されてしまいました。鬼は、

（これでは、食べる食べるといっても、食べられるわけがない）と思って、家来けらいの鬼をふたりつけてきました。そして、こちらは家来と娘の三人、あちらは男ひとりで、向かいあって首くびにひもをかけ、ぐつとひっぱり合あって、首相撲くひずもうしました。それでも男が強くて、鬼はみんなひっくり返されてしまいました。

男はそこを通っていってしまいましたとき。

おしまい

原話 『浪速の昔話』笠井典子編 日本放送出版協会刊

再話 村上郁